

成人期女性の ADHD における WAIS-III のプロフィール特徴

○久保 りつ子・牧原 寛之（非会員）

（牧原クリニック）

キーワード：注意欠陥/多動性障害、成人期女性、WAIS-III

WAIS- III profiles in women with Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder

Ritsuko KUBO, Hiroyuki MAKIHARA[#]

(Makihara clinic)

Key Words: Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder, Women, WAIS-III

目 的

成人期の注意欠陥/多動性障害(以下 ADHD)は、日本では 2000 年頃から注目され始めた。(田中, 2013) DSM-5 (American psychiatric association, 2013)によると、疫学的には成人期の ADHD は 1.6:1 で男性の方が多くとされているが、実際には仕事や学業、家事、育児の問題を訴え「ADHD ではないか」と自ら受診する成人期女性は少なくない。児童の ADHD においては、WISC-III や IV での認知特徴についての研究が数多くあり、群指数では処理速度や作動記憶の低い傾向が示されている。一方で成人期の ADHD について、Wechsler 式の知能検査を用いて分析している研究は本邦ではほとんどない。

本研究では、成人期女性の ADHD に施行した WAIS-III を取り上げ、そのプロフィール特徴について分析する。

対 象 と 方 法

対象：当院を受診し精神科医が ADHD と診断、WAIS-III を実施し、IQ が正常域にある成人期女性 6 名 (16~46 歳)であった。方法：DSM-IV-TR、Utah criteria に基づいた ADHD チェックリスト並びに WAIS-III、バウムテストを実施した。WAIS-III は個別に分析した後、6 名の平均値を出し、WAIS-III の統計値と比較、分析した。

結 果

1. 対象の分析

DSM-IV、Utah criteria の ADHD チェックリストを施行したところ、被験者 6 名とも不注意優勢型の ADHD に分類できた。

2. 言語性尺度と動作性尺度の比較

被験者全員が言語性優位であり、6 名中 4 名に言語性 IQ (以下 VIQ) と動作性 IQ (以下 PIQ) に 5~15% 水準の有意差が認められた。IQ を平均すると VIQ105、PIQ88、全 IQ96 であった。

3. 群指数間のディスクレパシー

6 名を個々に見て行くと、群指数差 6 項目の内、5~15% 水準の有意差がそれぞれ 3~5 項目間に認められた。また群指数平均での差をみると、図 1 の通りであった。PO-WM では有意差のある者は 5 名いたが、差が正負逆方向に分かれたため、平均すると有意差は出なかった。

4. 下位検査における特徴

言語性尺度で 5~15% 水準の有意差のあった検査は「単語 (ss13.4)」「理解 (ss13.2)」「算数 (ss7)」であり、前者 2 項目は有意に高い値となった。一方「算数」は全ての者が平均評価点を下回り、6 名の平均でも有意に評価点が低かった。また動作性尺度では「絵画完成 (ss6.7)」のみが有意に低かった。ただ有意差までは出なかったものの、「符号 (ss7.2)」「積木模様 (ss7.5)」「組合せ (ss7.2)」「記号探し (ss7.2)」では、6 名の評価点の平均は全て 7 点台であった。

考 察

まず、VIQ と PIQ の比較から、被験者はいずれも言語性優位であり、聴覚入力時の言語理解、整理、表現にはほとんど問題がないと考えられる。一方で視覚的情報を利用することやものを操作することは不得手とするようである。

群指数間のディスクレパシーも顕著であり、言語理解 (VC) に比して、処理速度 (PS)、知覚統合 (PO)、作動記憶 (WM) が特に低いことが示された。つまり言語理解力は優れていても、視覚的情報を整理し、見通しを持って取り組んだり書いて表現したりすることが不得意と考えられる。

さらに下位検査をみていくと、語彙数が豊富であり状況をイメージし常識的な判断を考えていく力には優れていることが解る。一方で言語性尺度の中でも、「算数」のように見通しを持って段取りを考えなければならないような検査で評価点が低かった。また「算数」では問題を一度で聞き取られず、再度聞き直す被験者が多かった。文章題の大切な部分を抽出できないことから、注意力の問題がうかがえる。

動作性尺度では、描画や記号の肝心な点に着眼できず、余計な刺激に翻弄される様子が見られた。「絵画配列 (ss11.2)」が平均を上回っていたことから、視覚的な情報に加え、継時的な変化や脈絡などの手がかりがあると状況を読むことはできると考えられる。しかし「積木模様」や「符号」「記号探し」のような幾何学的な図形は操作し辛いものようであった。このように同じ視覚刺激であっても、注意しやすいものとそうでないものがあることが示されている。

さらに検査での操作について検討すると、「積木模様」では、教示図版に従って端から順番に積木を置いて行く方法を選択する被験者が多く、これが処理速度の遅延につながっていた。同様に「符号」「記号探し」でもかなり丁寧なかき方であり、間違いはほとんどないものの処理速度が上がらなかった。つまり検査場面で計時されている状況であっても、要領の良い操作ができないことが解る。これは同じような視覚刺激に翻弄されたものと推察できるが、失敗をしないようにと慎重になった結果とも考えられる。「組合せ」では、試行錯誤的に接合点を探そうとする様子が見られた。時には接合点が合っているにも拘わらずまた外してしまい、明らかに混乱してしまう場面もあった。ここからも視覚的情報の手がかりが示されていてもその着眼点に気づかないことがうかがえる。

以上のことから、WAIS-III においても、被験者の注意力の問題や能力の個人内差が顕著に示される結果となった。今回の被験者は、真剣に思索し取り組んでいるにも拘わらず、実際には段取りが悪くものごとが達成し辛い状況にあり、不全感を抱きやすい状態にあると考えられた。

今回は成人期の女性少数での研究であったが、今後は男性も含め、成人期の ADHD の認知特徴を把握し、二次障害への対応や支援について、さらに検討することが望まれる。

図1. ディスクレパシー

VIQ105 - PIQ 88	17 ***
VC 108 - PO 85	23 ***
VC 108 - WM 93	15 ***
PO 85 - PS 84	1 ns
VC 108 - PS 84	24 ***
PO 85 - WM 93	-8 ns
WM 93 - PS 84	9 *

***:p<0.05 **:p<0.15